

「タンザニア滞在記」

1998年の暮れも近い10月末、目的は開発途上国に対する技術援助のため2度目のJICA専門家としての仕事に就くことになった。前回の中東オマーンでの指導経験を生



テレビ放送機の測定技術指導中

かすこと、また同じイスラム教徒の多い場所でもあり気楽に出かけた。行き先は珊瑚礁で出来たザンジバル島で、空路は関空→ロンドンヒースロー空港→イギリス南部のガットウーク空港→タンザニアの首都のダレスサラーム空港→ザンジバル空港への長い空路のうち、ウガンダ上空でのDC10の障害、ビジネス客のみの小型オンボロ？チャーター便に乗換え、など様々なハプニングに遇ったが、ザンジバル空港では放送局の代表者らによるVIP並みのあたたかい出迎えを受けるなどアラウの神のお蔭か、無事遠い勤務地に到着出来た。

インド洋に浮かぶこの島は沖縄本土ぐらいの小島で、迷路に立ち並ぶアラブ風の建物、鎖で繋がれての奴隷の売買市場跡、美しいビーチの風景などの見物、綺麗な海でのダイビングなどでタンザニア本土のサファ

リー以上に観光客に人気がある様子。

ここの人口は20万人弱ならずで、26年前開設の国営(TVZ)のTV放送は島のみを主エリアとし、本土側には本土のみをエリアとした民放のみで国営局はない。ひとつの国の中でこの様な変な放送の実体は国の成立に由来しているらしい(タンザニアは本土タンザニカ国と独立国ザンジバル連合)。

TVZは夕方より7時間ほどの放送で、職員は150人ぐらいの規模、

殆どの放送設備は数年前に更新した日本からの援助物件で、技術職場には・ファクス・コピー機・電卓さえない有様だが、職員は黒い顔に目は明るく輝かせ真剣そのもの。



外壁を珊瑚・小石で造った海辺のレストラン

毎朝インド洋を眺めながら豊富な果物がメインの朝食を味わい、局には徒歩10分少々のため送迎は辞退し、舗装のない道を車体には日本文字の何々商店などと記載してあるままの中古車などを眺めながら歩いて通勤した。朝の気温は30度前後、日陰で定職の無いふらふらした多くの若者を見かけ、彼等とも顔馴染みとなりモーニングまたジャンボ（スワヒリ語）等と笑顔で挨拶を交わすことも多かった。職員は殆どイスラム教徒で昼食はなく、昼は20分程度のお祈りタイム、勤務は3時まで、夕食は殆どホテルで、時には庶民的な海辺の屋台ですませた。



また、無数の蠅が飛び交う市場で買い込んだ材料での自炊もした。ここでの治安は特に問題はなかったが、マラリア菌の蚊には苦勞し、夜の外出には特に気を使った。散歩の途中通行人より、お前をTVで見た（空港での到着放映）といって目を輝かせて挨拶をしてくれたこともあった。

更に日本では考えられない事には国営放送がCMを放映し経費捻出、また街の電気店は安いセットを売るため、衛星放送を受信してVHFに変換し放送をしているなど。受像機の普及率は低く、街頭テレビを楽しんでいる人々の姿には、わが国の力道山TV放送当時が懐かしく思いました。

業務のため、また3ヶ月間の短期派遣のため、タンザニア本土での観光など全然出来なかったが、途上国の貧しい状況を日本の40～50年前の当時と比べながら、ザンジバル島での多くの人々と接し、職場の人間関係に重きをおいて国際技術協力の仕事が出来た有意義なタンザニアのザンジバル島、滞在でした。

(RSK OB) 篠原加行

2007/7 寄稿

